

第76回 GAORA 番組審議会記録(2022 年 3 月開催)

第 76 回番組審議会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、書面による開催としました。今回は、以下の番組について審議を行い委員の皆様から次のようなご意見をいただきました。

<審議番組> ありがとう斎藤佑樹 ～最高の仲間と過ごした 11 年間～
初回放送:2021 年 12 月 26 日(日) 13:00～14:00

<番組概要>

GAORA SPORTS が追いかけた 11 年間の秘蔵映像、新撮の栗山元監督や杉谷選手への取材、さらには引退セレモニー当日の舞台裏を撮影した映像も組み合わせ、「ハンカチ王子」のプロ野球人生を振り返りました。本人へのインタビューは、ファームの本拠地・鎌ヶ谷スタジアムのスタンドで行い、たくさんの日々を過ごしたこの地で思いを率直に語ってくれました。

多くのファン、多くの選手に愛された野球選手「斎藤佑樹」の魅力が満載です。

<委員長総括>

■本番組は、GAORA が撮りためた映像の大切さ、撮りためてきたことへの積極的な評価、また、チームに長年寄り添い続けてきた GAORA の姿勢、そして、その内容や構成を良く評価するコメントが寄せられている。また、感じ方に違いはあっても、斎藤佑樹の「生きざま」に対する感情移入を示すコメントが多くみられるのも本番組の特徴である。

彼の 11 年間の追って、野球選手「斎藤佑樹」の魅力を伝え、彼が持っていたのは「最高の仲間」であったことを紐解くという意図は果たされたと考える。本番組では、「人としての斎藤佑樹」が描かれている。

スポーツ専門チャンネルである GAORA には、スポーツそのものの魅力や楽しさをリアルに、あるいは噛み砕いて視聴者に届ける使命があることは言うまでもない。対象を「スポーツそのもの」だけにとどめることなく、そのスポーツを成り立たせる背景、すなわちその発展史や「みせるスポーツ」を生み出す選手の内面を深く掘り下げることが重要である。そういう視点からスポーツをみせることは、スポーツそのものに興味・関心のなかった人々に、新しいスポーツへのタッチポイントを提供することにもなり、人と人とを結びつけ、円滑な社会を実現する「公共財」としてのスポーツの発展に貢献することになるからである。

今後もスポーツを深掘りした好番組が多く制作されることを望んでいる。

<審議意見>委員の主な意見は次の通り。

■一番近い存在だった GAORA は、斎藤佑樹に労いとリスペクトを込めた最高のプレゼントをしたように思えた。タイトルの「ありがとう…」の重みを感じた。

日本中の注目を集めた「ハンカチ王子」の誕生から 11 年にわたるプロ野球人生の映像が彼の総てを語っていた。仲間が企画したセレモニーも、恐らく彼の日頃の言動、振る舞いが周りの多くの選手から尊敬され、慕われる存在だったからだ映像から感じ取れた。

プロ野球選手としての結果ではなく、彼の「人間の魅力を伝えたい」という制作者の意思が伝わってきた。引退後も彼を応援したくなるような内容であった。高校、大学時代の栄光から苦難のプロ野球。人生の光と影の部分をうまく表現していた。苦しい時にもインタビューでは常に前向きなメッセージを発信し、忍耐強く再起を賭ける姿をしっかりと映像で見せていた。

11年間契約を続けてきた球団、栗山監督は彼に何を期待していたのか。番組内でもさらりと触れてはいるが、個人的にはこの辺りをもっと掘り下げて欲しかった。

■この番組は、選手と近い距離で地道に取材等を行ってきた GAORA だからこそ、制作することができた番組であった。

本人のインタビュー、他の選手や監督へのインタビュー、試合のハイライト映像、ロッカールーム等舞台の裏側での様子など、とてもバランスよく、テンポよく、最後まであつと言う間の展開であった。敢えていえば、きれいにまとめられすぎている印象を受けた。

もっと自分をさらけ出したり、もっといろんな人にアドバイスをもらったり出来なかったのだろうか。このあたりを掘り下げていけば、更に見応えが増したように思えた。

ほとんど思うようにいかなかった選手生活、突き刺さる言葉であった。これからの彼の人生が自分の思い描いたものになればいいのにと観終えて感じたことである。

■この番組から鳴り物入りで入団後 11 年間の彼の生き様を知ることができた。入団後の苦難が続く様子に加え、ファンの期待を背負い込みプレッシャーの中で、再起を見据えて努力する様子を改めて知り、彼の強い意志を知ることができた。プロ 11 年間、素晴らしいとは言えない成績であったが、ファンからは忘れられず愛してもらえことや彼の送ってきた誠実な日々が、杉谷選手のインタビューから、そして最後の引退試合での様子から伺うことができた。

自分で決めた新しい道をどのように進んでいくのか、今後についても知りたくなった。

■引退セレモニーでの言葉から始まり、高校時代まで振り返って斎藤佑樹の野球人生を振り返る作りになっているところがとても良く、視聴者の気持ちが入り込める展開であった。これが出来たのは過去の映像が残っているからであり、取材を続けることの大切さを感じた。

常に期待され世間の注目度が高いことが、一人のスター選手をいかに苦しめ、その中で自分を見失わずに真摯に野球に向き合い続けた選手の苦悩と光が見え、彼と共に自身の人生を振り返った視聴者も多かったのではないだろうか。

彼自身の内面までは分かり辛かったところ、杉谷選手や栗山前監督のインタビューが良いタイミングで入っており、とても奥深いところまで彼の人となりを感じる事が出来た。

番組の一つのテーマでもある「持っている」というキーワードが、彼の口から「持っていたのは最高の仲間」というコメントがありとても腑に落ちた。鎌ヶ谷組からの歌のビデオ、送り出す大勢のファン、ベンチ裏から最後のマウンドを見守るチームメイトの姿を見て、彼が単なる元スター高校球児ではなく、人としてとても魅力的だからこそ「最高の仲間と過ごした 11 年間」があったのだと最後まで気持ち良く見終えることが出来た。非常に清々しく、感動的な番組であった。

■「11 年間、お疲れ様」まずはそういう言葉なのかと思う。この番組は、プロ初勝利からその後低迷を続けた 11 年を追っているが、なぜ彼が長く現役選手を続けられたのか、なぜ頑張れたのか、そこは最後までよく分からなかった。「結果を出したい。」「うまくなりたい。」「おそらく、彼の言葉と、栗山監督の「斎藤佑樹にしかできない野球人としての使命がある。」「泥だらけになって必死にやる姿を見せる。」との言葉に尽きるのだろう。アイドルとしての使命なのか、監督の言葉は、私はよく理解できなかった。ただ、番組としては重要な言葉だったと思う。

劇的な展開のない番組ではあったが、彼のファンにとっては大切な映像であろうし、ファイターズを完全フォローする GAORA としては必須の番組だろう。劇的な展開がないというのは否定的評価ではなく、彼自身が黙々と頑張る様子が描かれ、そうした彼の野球人生を象徴的に示した「スポーツ・ドキュメンタリー」として、淡々と描き記録することもまた重要なことだと考える。

■斎藤佑樹という選手の「華」あればこそその番組であろう。インタビューで「都合のいい部分を出したかった」、「選手としてのみ注目して欲しかった」と彼は言った。とても正直なコメントだと思う。ただ、「都合の悪い部分」即ち、選手として以外の部分が大きく注目されたからこそ、今の彼があるとも言える。そんな葛藤を感じることも垣間見られた良質の番組であった。

1 年ごとの映像を交えて振り返った作りは、まさに GAORA ならではの作りであった。

「持っているのは最高の仲間です」という彼の言葉、心動く挨拶だったが、番組内で数回使用したのはいかがだったか？「金言」だけに繰り返し使いたかった作り手の思いも十分理解しつつ、1 度だけ使うことでの効果の方が大きかったかもしれないと私は感じたところだ。

エンディング近くの選手たちの「合唱」。確かに良かった。彼の感動もよく分かる。だとすれば、あのシーンをもう少し感動的に描くことができたかもしれないと改めて考え直した。

「泥臭さ」という表現もあったが、やはり彼は「スマートさ」がよく似合う「ハンカチ王子」なのだと思う。それが斎藤佑樹という人なのだろう。

最後の「GAORA はどうですか？」の問いは要らなかったかもしれない。これは嗜好の問題になるが、おちゃらけなく締めて欲しかったというのが私の正直なところだ。

GAORA では、これらの貴重なご意見を、これからもより良い番組をお届けしていくために大いに活用させていただきます。

[審議委員]

種子田穰委員長、影山貴彦副委員長、黒田勇委員、藤井純一委員、沢松奈生子委員、森本志磨子委員、山本泰博委員（以上 7 名）

以上